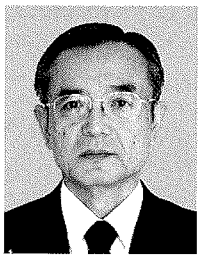

巻頭言

「えーっ」と驚いた各地の多様な風景

(財) 日本植物調節剤研究協会　評議員
(財) 残留農薬研究所　常務理事
森田利夫

これまで初めて見た時，聞いた時「えーっ」と思わされた風景をいくつか紹介します。私の受け止め方ですから「そんなことか」や「間違い」もご容赦を。

竹の分げつ

ＪＩＣＡの技術協力プロジェクト調査団の一員として度々インドネシアを訪れる機会がありました。あちこち回りましたが，移動中一番目についたのが，ぎっしり束になって生えている竹の林。

尋ねると竹は分げつで増えるとのこと。そう言われてみると，水稲の株を大きくした感じなのかもしれません。しかし，そんなことが想像もできないほど猛々しい眺めで，日本の管理された竹林の風情とは異次元の世界でした。

夏に花がない

大阪花博は1990年4月から9月までの半年間開催されました。初期の準備に関わりましたが，思わぬ苦労をしたのは夏の展示。

夏は緑の濃い時期で，「花と緑」の博覧会に最適の時期のように思えるのですが，実はさにあらず。日本の夏は暑すぎ，花にとって夏枯れとも言える時期だったのです。

花博以降夏の暑さに強い花が増えてきたように思われますが，当時はヨーロッパのとの差を痛感させられました。

道端のシクラメン

花博で一度だけヨーロッパに出張する機会がありました。仕事柄イギリスのキューガーデンの視察も日程にあり，オオオニバス等の珍しい植物を目にしましたが，一番印象に残ったのは移動途中の道端のシクラメン。丁度ミニシクラメン程度の大きさだったと思います。

当時，近所の温室で毎年シクラメンを買っていましたが，ミニを見た記憶があまりなかったので特に印象に残ったのでしょうか。日本のタンポポのように，道端でたくましく生きているように感じられました。

梨穂木の輸出

植物防疫所は病害虫の侵入を防止するための輸入植物の検査だけでなく，相手国の要求に応じて輸出植物の検査も行っています。輸出検査でこんなことがやられているのかと感心したのが台湾向け日本梨の穂木の輸出。

この穂木は苗木に仕立てるためのものではありませんでした。年中温暖な台湾では日本梨が花芽を付けないので，花芽を付けた穂木を毎年大量に輸入し，在来種に接いで１年限りの日本梨生産を行っていたのです。

軒下までの雑草

以前農薬検査所の近くに木造平屋建ての都営住宅がありました。現在では４階建ての立派な建物になっていますが，建替えのため一時全世帯が退去しました。

その間，世話をする人もいないのに残された花が咲き，夏には軒下にまで届こうかとするほどの雑草が繁茂。イギリスからの客人にわざと見せた記憶があります。

ゴルフはイギリス発祥とのことですが，彼の地と異なり日本でのゴルフ場管理の大変さを感じさせられた風景でもありました。

これらを通じて

ここで述べたような自然条件のほか，社会・経済的条件の異なる様々な地域があることを経験させていただきました。

農業分野においては特に地域の特質に配慮した試験研究や施策の展開が重要ですが，国際的食料争奪戦が始まろうとしている昨今，我が国において農薬の役割が正当に評価されることを期待して止みません。